

2008年度 2部経済学科藤井ゼミ ～夏合宿記～

行き先：信州木曾

参加者：(4年生) 一井正樹 太田博幸 高橋梢 玉那覇麻衣 堀内雅代 松村健一郎
(3年生) 汐見亮

運 転：太田博幸 松村健一郎

まるで天気の様が、私達のために雨を降らすのを待っていてくれたかのような、そんな3日間だった。事前の天気予報はよりによって3日間とも雨マーク、私達は当初の予定を変えざるを得ない覚悟さえしていたのだ。不安を抱えながらも、9月2日朝、東京を後にした。

目指すは信州木曾。ここには標高3,063mの御嶽山(おんたけさん)をはじめとする雄大な自然と、江戸時代から今に残る宿場町がある。私達は3年時に共同研究で「観光による地域振興」をテーマに論文を執筆した。今回の合宿はいわばその実況検分が大きな目的の一つであった。

【第1日目】9月2日(火)

《はりきる人》

車2台で出発した私達と一人電車で向かった先生は、木曾福島駅にて合流。昼食を済ませた後、早速御嶽山を目指した。ちなみにこの日の昼食は、駅近くにある手打ちそばの老舗「くるまや本店」でとった。代々伝わる独自の製法にて挽いた自家製のそば粉と、毎日継ぎ足しながら大切に守ってきた秘伝のそばつゆが特徴だ。食べてみると麺に厚みと腰があり、本当に美味しい。この美味さにはみな舌鼓を打った。



御嶽登山は一時小雨に降られたものの、予報ほど本降りにならなかったのは幸いであった。ここで俄然はりきりを見せたのが先生である。山と見れば一も二もなく登ってしまうのが先生だ。この合宿で最も楽しみにしていたのが御嶽登山だという噂もある。現に先生は私達などよりはるかに足取りが軽く、スタスタと登ってゆく。時々、山の高度まで測れるご自慢の腕時計で

「今2,300メートル！」

などと嬉しそうに叫びながら歩を進めてゆく。

だが、2、3歩進んだところで、

「あれ？2,350 になっちゃった！」

などと慌てたりしていたので、どうやらあまり当てにならないらしい。

結局、8 合目を目指すも予定よりやや遅れていた為に、残念ながら途中で折り返すことにした。ロープウェイを降りた場所（標高 2,150m 地点）まで下ると東屋があり、そこで小休止をとった。先生はリュックの中からおもむろになにやら道具を取り出すと、それをせっせと組み立て台の上に置いた。キャンプ用のガスコンロだった。そこにこれまた持ってきた小鍋を置き、水を入れ沸かした。

先生はそれで即席のカフェオレを作って、私たちに飲ませてくれたのだった。旨かった！！山の上で飲む熱いカフェオレ、これは格別なものがあつた。



下山後、山のかもとにある木曾温泉に浸かり、登山の疲れを癒した。それから途中のスーパーで今晚と明朝の食料を調達した私たちは、二夜の宿である「のりえの家」に向かった。

夜は、なんと先生の学生時代からのご友人であり、現在は長野県庁に勤めておられる中村さんにもお越しいただいた。おかげで先生との思い出話などを聞きながらの、楽しい夕食となった。中村さんの「みんな藤井の指導受けてるの？大変だねえ…」には、やけに実感がこもっていて一同苦笑い。



【第2日目】9月3日（水）

《目覚まし先生》

翌朝、我々男4人衆は、目覚ましよりも早い先生の声で目を覚ました。女性陣は2階で寝ていたために被害は免れた。幸いといっていい。昨夜一番遅くまで起きていたはずの先生が、なぜ一番早く起きられるのか…今もって理解しがたい。

せつかく早起きしたので、先生と我々男4人衆と、これまた2階で早起きの堀内さんとの計6人で、朝の散歩をすることにした。予報に反してこの日も快晴である。山から吹いてくる風が実に心地よい。きれいな花がとても多いのに驚く。近くに流れている小川に最初に足を踏み入れたのは筆者であった。水を見ると無性に入りたく

なる性分だ。冷たくて気持ちがいい。男衆はみな入った。先生が我々の近くにでっかい石を落として水しぶきをかけてきた。意外と子供である。

朝食は堀内さんお手製のサンドイッチ。具が2種類あってどちらも旨かった。さすがである。

《藤井黄門一行、街道をゆく》

朝食を終えて向かったのは、本日のメインイベント“旧中山道、妻籠～馬籠間ハイキングゥ～！”の出発地点である妻籠宿。江戸と京を結ぶ中山道六十九次のうち江戸から数えて四十二番目の宿である。鉄道や道路の発達とともに次第に宿場としての機能を失っていった当宿は、衰退の一途をたどった。ところが昭和になって、江戸時代からの宿場の町並みが色濃く残されていることを改めて評価されたことから、町を挙げての保存運動が始まった。その保存運動たるや徹底している。“売らない・貸さない・壊さない”の3原則を作り、ここで生活しながらそれを堅持しているのだ。まさに観光による地域振興の典型的な例といえるだろう。

さて、私達がまず初めに見たのは「妻籠宿本陣」である。ここは明治に至るまで本陣、庄屋を兼ね、代々島崎氏が当主を勤めたところである。文豪島崎藤村の次兄広助（ひろすけ）が最後の当主となった。



母屋の中は実に興味深かった。よく大河ドラマや時代劇で見る典型的な屋敷である。広い土間に弐の間、三の間、奥の間など、全部で十以上もある間取り。まさに家の中でかくれんぼが出来るぐらいに広い。方向音痴の筆者が住んでいたら、おそらく毎日迷子になってしまうことだろう。

本陣を出て少し進むと道が直角に折れ曲がった階段がある。これはいわゆる“枡形（ますがた）”といって、敵の侵入を阻むための策として作られたものらしい。当時の宿場町はどこもこんな感じだったようだ。現代のようにセコムのない時代だ。素晴らしい知恵といえる。



さて、目の前に続く街道は、まさに水戸黄門の世界である。誰が助さん、格さんかは分からぬが、少なくともご老公は先生である。その藤井黄門を筆頭に、我々はひたすら長い街道をゆく。昔の人は本当にエライとつくづく感じずにはいられなかった。よくもまあこんな長い道のりを歩いたものだと。私達のように、マツケン（松村）や汐見君の怖い話を聞きながら歩いた訳でもないだろうし。私達はだいぶこれで気が紛れたものだが…。

途中、残念ながら今回来られなかった仲田智恵子さんのために、木曾ひのきで作られたかわいいクシをお土産に買った。きっと喜んでくれたに違いない。



《いきなり滝に！？》

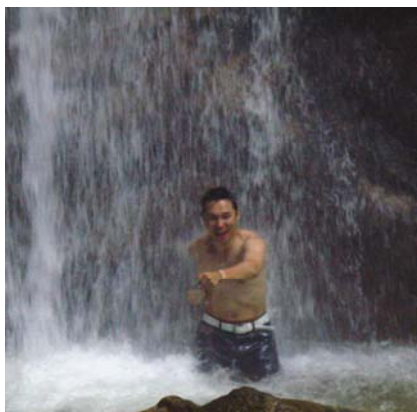
途中、滝があった。男滝・女滝（おだき・めだき）という。吉川英治の『宮本武蔵』の舞台となった滝である。みなしばしその荘厳さに見とれていた。

と、筆者はそこでおもむろにシャツを脱ぎ出し、時計など身につけているもの一切を外すと、ジーパン一丁でいきなり滝つぼに入ってしまった。みな（こいつは一体何をしているんだ！？）と不思議に思ったことだろう。

「いっちゃん絶対ジーパン乾かないから！！」大田が心配そうに言う。が、筆者は意にも介さない。（この先まだ4キロもあるんだ、どうせ歩いてりゃ乾くだろう）そうタカをくくっていた。

滝に入った理由は2つある。1つはとにかく暑かったから、もう1つはかの剣豪武蔵も修行したであろうこの場所で、自身も修行してみたかったからである。千載一遇のチャンスではないか。

筆者は滝に打たれながら、気合を込めて正拳中段突き 50 本を繰り返した。たとえわずかでも、武蔵と同じ場所で修行が出来たことを光栄に思う。筆者生涯の思い出。



出発から約 3 時間を経て、一行はようやく馬籠に到着した。(やっと着いた!!) 素直に嬉しかった。藤村はよく言ったものである。木曾路は、本当にすべて山の中であった。それを知っていたのは先生と、事前に『夜明け前』を読書感想文の課題として読んでいた汐見君の 2 人だけであつたらう。あとの我々は、はっきり言って少しなめていたのかもしれない。昨日に続き、結局今日も山歩きに終わった…達成感とともに、そんな感慨がしみじみと湧いていた。

ちなみに筆者のジーパンはというと・・・心配御無用! ちゃーんと乾いていた。世の中何とかなるもんだ。



《取って、撮って事件!?!》

この夜は、「二本木の湯」で汗を流したあと、隣接するキャンプ場でバーベキューを楽しんだ。太田が腕を奮ってくれた焼きそばは、なかなか旨かった。さすが元調理人である。

ここで“取って、撮って事件!?!”が起きた。

最初に気づいたのは高橋さんだった。右隣に座る堀内さんの胸元に、なんとカメムシがくっ付いていたのである。が、当の本人はそれにまったく気付いていない。高橋さんは慌ててそれを知らせた。

「ぎゃああああっ!!」

気付いた堀内さんも大慌てである。だが 2 人はどうすることもできない。カメムシは触れただけでも強烈な臭いを発するし、何より虫そのものが怖かった。

ついに 2 人は、堀内さんの右隣に座る先生に助けを求めた。まだ事態を把握していない先生にも分かるように、高橋さんは堀内さんの両腕を抱え先生にも良く見えるようにし、必死の形相で訴えた。

「取って! 先生、取って!!」

「ん? あーあーあー」

やっと振り向いた先生、ようやく気付いてくれたようだった。

ところが、である。何を思ったのか先生、懐からやおら自身のカメラを取り出すと、なぜか「デヘヘ〜」などと不気味な笑い声を発しながら、いきなり 2 人に向けてパチリ! とやったのだ。

(エッ!?) みな一瞬あっ気にとられた。

と、次の瞬間ドツツと笑いが巻き起こった。なんと先生は 2 人の必死の「取って!」を「撮って!」と勘違いしていたのである。これはこの合宿の最高のツボだった。私たちはこのときほど先生を尊敬したことはない。並じゃない! 先生は並じゃない!! と。おかげでこのときの写真はほとんどないものになった。題して“悪魔の微笑み”。

このカメムシ、結局勇気を出して取ってくれたのは玉那覇さんである。しかも素手で。(素手で!?) そう素手で。男でも手を出すのがはばかれるこの虫に対して、素手で挑んだ彼女には、さすがと言わねばなるまい。だが、その後どうなったかについては、皆様のご想像にお任せするとして。



【第3日目】9月4日（木）

《前代未聞！？》

快晴である。やった、今日もツイている。

3日間お世話になった「のりえの家」を後にし、今日の最初の目的地である「赤沢自然休養林」に向かった。

いや、その前に、一度昨日散歩したときに遊んだ小川に立ち寄った。実は筆者は、今日こそは、と密かに思っていた。体丸ごと川に入って遊びたい、と。むろん海パンなどは用意していない。宿で履いていたスウェットをまくり上げて、海パン代わりにするのである。この計画を男衆に話すと、みんなも興味を示してくれた。女性陣には内緒であった。だって一緒に遊べないから。

水はけっこう冷たかったが、気持ちよかった。お互い水をかけ合ったり川に押し倒したり…とにかくはしゃいだ。するとうらやましかったのか女性陣も靴を脱ぎ、裸足になって川に入ってきた。みな一緒になってはしゃぎながら、筆者はここであることを思いついた。（そうだ、いっそのこと、全員で空手の稽古をしよう）と。

一同2列に整列、させられた（笑）筆者に有無を言わず、筆者はもう乗り気である。かつて道場で子供たちに指導していたときのことを思い出していた。簡単に基本の立ち方から突き方までを教えると、

「気合入れて〜！」

の号令とともに正拳中段突きを繰り返した。みな一突き一突き

「エイッ、エイッ」

と気合を入れながら。だが、みんなの気合が一つになるまでは終わらない。

50本を突いたところで、ようやく終わった。お互いに礼をして、突然始まった朝の稽古は無事終了した。男滝・女滝で滝打ちをした人は、ひょっとしたら過去にもいたかもしれないが、この小川で空手の稽古をした人は、おそらく後にも先にも我々だけであろう。



《大自然の神秘》

「赤沢自然休養林」は、一言で言えば山歩きを楽しむところである。そう、また山歩きである。結局私達の今回の旅は、山歩きに始まり山歩きに終わったのである。

それにしても、樹齢300年を越える木曾ひのきに囲まれたおよそ3.5キロのコースは、森林浴を楽しむに十分なコースだった。だけでなく、忘れていた時間を取り戻す、そんな力もこの大自然の中には確かにあった。

途中、沢に下りて水を飲んだり石投げをして遊んだりした。なんだか童心に返ったような気分である。

ところで、ここは森林浴発祥の地であるそうだが、むべなるかなという気がする。マイナスイオンをいっぱい浴びた3.5キロは、本当に気持ちよかった。



さて、いよいよ最後の目的地は、木曾八景の1つにも数えられる景勝地「寝覚めの床」である。ここは巨大な花崗岩（かこうがん）が幾重にも壁のように連なる、まさに圧巻の場所である。その様はまるで自然の彫刻のように見事であった。“事実は小説よりも奇なり”という言葉があるが、この言葉を借りれば、“自然は芸術よりも奇なり”といったところであろうか。

そういえばここは、浦島太郎が玉手箱を開けてしまった場所としても知られている。奇しくも先生が、今朝の車の中で“人生すべてイリュージョン（幻想）”なる言葉を吐いたが、けだし至言である。



【最後に】

最後にここで、今回私たちがお世話になった宿「のりえの家」について少し触れたい。ここは、“飲み物、食べ物、持ち込み自由、調理もできる、自炊型農家民宿”というシステムの宿である。私達はやらなかったが、希望

すれば農業体験もできる民宿なのである。

1995年秋にオープンしたこの宿は、女将の田中憲江（のりえ）さんご主人との10年来の夢でもあった。「ヨーロッパではバカンスと称して3週間も家族旅行する習慣があるが、日本ではどうしてできないのか?」「何日も滞在できるような、安い施設が日本でも必要だ」

などという2人の話し合いがきっかけだった。

ところが、ほどなくしてご主人のお父さまが不治の病にかかり他界、さらには憲江さんのお母様も寝たきりとなり、加えて憲江さんご自身も非常に重い更年期障害に悩まされるようになってしまった。とても民宿どころではなくなった。

憲江さんの体調が少しずつ回復し始めたのがちょうど1995年ごろ。これに合わせて築100年、建坪60坪の木造2階建ての家を改修することになった。このときご主人が「どうせ改修するなら」ということでお客用のキッチンやトイレも作ったことから、10年越しの夢はいよいよ実現へと向かう。

今では、一度来た客が何度も泊まりにいく、リピーターに愛される宿となった。他にはないアットホームさがあり、自分の家の次にホッと息を抜けるような温かい宿として知られている。

私たちが、女将の憲江さんの温かいお人柄と、広くて囲炉裏のある畳敷きの部屋に、吸い込まれるような懐かしさを覚えた。なんだか田舎のおばあちゃんの家遊びに来たような、そんな懐かしさだ。朝、宿の近くを散歩しながら木曽のおいしい空気を腹いっぱい味わい、本当にずっとここにいたい、そう思った。

3日間快適に過ごさせてくださった、憲江さんをはじめ宿の皆さんに、この場を借りて一同、心からの感謝を申し上げたい。そしてこんな素晴らしい宿を紹介してくださった先生のご友人中村さんにも、改めてこの場を借りて感謝したい。

そしていつかまた木曽に行ったときに、ぜひ再び皆さんとお会いできることを祈って、この合宿記を閉じたい。

* この項は、『長野日報』「木曽ニュース—屋根のない学校 のりえの家」（1997年12月13日、14日）を参照致しました。



～追記～

「寝覚めの床」も見終わり、いよいよ信州木曽を後にしようかというとき、急に車のフロントガラスが雨に濡れ出した。なんという絶妙なタイミングだろうか。ありがとう神様!! 筆者は思わず天に向かって手を合わせた。

まるで天気神様が、私達のために雨を降らすのを待っていてくれたかのような、そんな3日間だった。

2008年10月吉日
一井 正樹 筆